

8、

美咲は、歩くスピードを落とすことなくまっすぐホテルへ向かった。

俺も、一昨日の美咲との情事の次の日の朝、モーニングを食べた喫茶店が目に入ると、さすがに美咲は、一昨日のホテルを目指しているのではないかと思い始めた。

「なあ、美咲、二人きりになれる場所って・・・」

半歩、後ろから、俺は握られた手を引っ張るように美咲に話しかけた。美咲は、俺の質問には応えず、若干歩く歩幅を狭くしたが、変わらずまっすぐ前を見たまま歩き続けた。

5分もせずに、美咲の立ち止った目の前には、やはり見覚えのあるラブホテルが立ちはだかった。美咲は、一瞬、躊躇したようだが、俺の手を離すことなくそのまま中へ入っていった。

俺は、美咲の「話」の内容は気になったが、覚悟を決め、先導してエレベーターに乗った。ホテルの入口に立った頃から、愛美さんの顔が浮かんでは消え、浮かんでは消えを繰り返していたが、部屋番号の点滅する扉に鍵を差し込むと美咲より先に中へ入り、コートを脱いでベッドの端に腰かけた。美咲も上着をハンガーにかけると俺の隣に座った。俺は、何も言わず、きゃしゃな美咲の肩を抱くと美咲の顔に自分の顔を近づけた。美咲は、抵抗することなく、軽く目をつむった。俺は、そのまま、美咲の唇に俺の唇を重ねると、目を閉じた。二人は、お互い軽く口を開くと、お互いの舌が絡み合うのを待ちわびた。先に舌を絡ませたのは俺だった。美咲もそれに応じ、抱き合い、長い長い接吻を交わした。俺が、服を脱ぎ、トラックス一枚になると、美咲は黙って俺の目の前に立った。俺は、美咲のブラウスに手をかけ、ボタンをはずした。スカートのベルトを緩めると脇のホックをはずした。スカートは、音もたてずにじゅうたんの上へと落ちた。ブラウスの間から見え隠れする薄いピンクのブラジャーとパンティーが俺の目の前で顕わになった。俺は続けて、ブラウスを脱がせると美咲は立ったまま目を閉じた。俺は、ベッドの端に座ったまま美咲の透き通るような裸体を見上げていた。そして、俺は、立ち上がり、美咲を抱きしめた。美咲の大きめの胸が俺の胸板に押し付けられた。ブラジャーの上からでも柔らかく、その感触は、俺の鼓動を早ませた。美咲の後ろに回した俺の両手は、ブラジャーの爪を弾くようによじって、背中で繋がっていたゴム状のベルトは二つに分かれた。それと同時に、ブラジャーからは胸がこぼれ出た。肩ひもを両側にずらすと、ブラジャーも床に吸い込まれた。俺は、立ったまま、美咲の胸にしゃぶりついた。

美咲は、瞬間、大きく息を吸い込んだ。そのまま、背中を、少しのけ反らせ、俺の頭を両の手で抱え込んだ。俺は、腰骨の辺りを抱きかかえ、その手で、パンティーのゴムに手をかけた。美咲は、鼻を鳴らし、吐息を大きくした。胸を口に含んだまま、俺は、ゆっくりパンティーを下ろしていった。パンティーを徐々にひざの方へ進ませると美咲の背筋の反り方は大きくなっていった。俺は、美咲の胸から口を離し、腰のくびれの方へ顔を動かした。そのまま、パンティーをひざの辺りまで下した時、光る糸のような雫が美咲の股間からパンティーに向かって伸びていることに気付いた。俺は、パンティーから手を離し、美咲の桃のように張りのあるお尻を抱えるように掴むと激しく揉みほぐした。

「あああああ・・・」

我慢していたのか、美咲の口から長いため息がこぼれた。

俺は、くびれた美咲の脇腹に軽く歯を立てた。その瞬間、美咲のひざは、崩れ落ちるように折れ曲がった。俺は、慌てて、美咲を抱きとめ、近づいたその唇にもう一度キスをした。美咲も、俺の唇に吸い付いた。唇が離れないように顔を寄せたまま、俺は、美咲をベッドに寝かせて、肩を抱いた手に力を入れると、もう一方の手を胸に回し、乳房を掴みこんだ。そして、指で乳首を摘まむと指先を動かし、もてあそんだ。美咲は、首を嫌々するように左右に振ったが、重なった口の中で舌をもう一度絡ませると、首を振るのをあきらめた。俺は、自分の下着を脱ぎ捨てて、美咲を強く抱きしめた。俺の膨張したペニスが美咲の太ももに当たった。俺が、美咲の身体の上に覆いかぶさろうとしたとき、美咲はかすれた声で言った。

「着けて、ね、着けて」

「えっ!？」

俺は、重なり合った唇を急に離してまで懇願した美咲の顔を覗き込んだ。

「あ、ああ、でも、ピル・・・」

俺の言葉を途中で制して美咲は言った。

「でも、着けて、お願い」

美咲の真剣な眼差しに、俺は、少したじろぎながら枕もとのゴムに手を伸ばした。

「あ、あの・・・」

口を開いて、何かまだ言いたそうな美咲を横目に、ゴムを着けた俺のペニスはもう美咲の股間を目指して動き出していた。俺は、美咲の腰のくびれとシーツの間に手を突っ込み、腰を浮かせた。俺は、美咲の首元に吸い付いた。のけ反って、筋の張った美咲の首から顎にかけて舌を這わせた。そのまま、顎にかぶりつくように美咲の顎の先端を口に含むと軽く歯を立てた。美咲は、身体全体で逃げるようにベッドの上へ這いずった。俺は、逃がさないように枕の脇から首の下へ手を入れると肩を抱いて、また唇を奪った。俺は、腰の下の手を美咲の内ももに這わせて、美咲の両足を広げると、その間に自分の下半身を固定した。唇の中では、生きた蛇が絡み合うように舌を巻きつかせながら、内ももの手で美咲の両ひざを折り曲げた。美咲も俺の次の行動を察知したかのように、息を荒げ、鼓動を早くした。俺も、我慢の限界を迎えた。片手をペニスに添えると美咲の薄めの陰毛を掻き分け、ペニスの先端を割れ目まで先導した。俺は、意を決したように、美咲の割れ目の中へペニスを挿入させていった。ゆっくり、ゆっくりと美咲の膣壁をペニスで感じ、その膣壁を脳に焼き付けるようにゆっくりとペニスを挿入させていった。

「ああ、ああ、ああ・・・」

それに合わせて、美咲はうめくような声を上げ、身体を硬直させた。両手で、俺の背中に爪を立てて、ペニスの挿入と共に少しずつ震えだした手をベッドに下ろすとシーツを握りしめ、ギュッと引っ張った。俺は、半分ほどペニスを挿入させると、いったん止めて、肩を抱いた手で美咲を強く抱きしめた。俺は、重なり合った唇も一度、離すと口を美咲の耳元へ持

っていき囁いた。

「美咲・・・」

俺は、「好きだ」と言いかけて、なぜか、その先は言葉にならなかった。しかし、たぶん、その時の俺は、美咲に、間違いなく恋をしてしまっていたに違いない。美咲も虚ろな目を薄く開けて、俺を一瞬見つめた。

「けーた・・・」

俺は、美咲の中の半分で止まっていたペニスに再度、血液が流れ込むのを感じた。俺は、美咲ともう一度、唇を合わせて、次の瞬間、一気に、そして力の限り、美咲の一番奥深くまでペニスを突き上げた。俺の力任せのひと突きに美咲はのどの奥の方から声をあげた。

「あゝーっーっ」

一瞬の出来事に、美咲の反りかえった身体はさらに大きく折れ曲がり、痛みとも、快樂とも、取れないような歪んだ顔をして、引っ張り続けたシーツをさらに引きちぎれんばかりに握りしめた。俺も、そのあとは、記憶が飛んでしまったように腰を動かし続けた。美咲の小刻みな吐息と俺の荒々しい息づかいがしばらく続いたが、俺は、両腕で美咲をしっかりと抱きしめ、そのまま、美咲の身体全体を丸いクッションでも抱え込むようにギューーッと俺の全身で抱きしめ、そしてグッとペニスを美咲の子宮奥深くまでに押し込むように突き立て、脈打つ俺の全身全霊は美咲の中で果てて昇天した。

美咲は、ぐったりと、もうシーツを掴む指も伸びきっていた。俺も、美咲の上で美咲に乗ったまま、精魂尽き果て動けずにいた。

しばらくして、俺は、横に転がり、深呼吸した。美咲の方を振り向くと、美咲も気付いたようで、こちらを向いた。俺は、美咲にほほ笑んだ。美咲も、一瞬、ほほ笑んだように見えたが、すぐに天井を仰ぐと顔を曇らせて

「ごめんなさい・・・」

そう言った。

「えっ？あっ、お金？」

俺は、急に正気になり起き上がって、ベッドから降りようとした。その時、

「違うの。あの・・・、あたし・・・」

俺は、天井を見上げたままの美咲に目をやり、怪訝に次の言葉を待った。

「あの・・・、あたし・・・、ごめんなさい・・・あたし、エイズなの」

9、

「えっっ！？・・・えっ、なに？・・・えっっ！？」

俺は、目の前の少女が何を言っているのか、理解ができなかった。

「・・・えっ！？」

「・・・あたし、HIVに感染してるの。・・・ごめんなさい。・・・ほんとにごめんなさい」

俺は、まだ、状況を把握できずに、ポカンと部屋の壁を見つめていた。そんな俺を横目に、美咲は、下着を着けると、乱れた髪もそのままにブラウスに手を通し、あっという間に上着を羽織ると部屋を出ていこうとした。

「あっ、ちょっと・・・」

慌てて呼び止めた俺の方を振り向くことはなく、美咲は、少しだけ身体を斜めに向け、

「・・・ごめんなさい」

壁に向かって小さく呟いて、触れていたドアのノブを回した。意を決したように美咲はドアを開けると、足早に姿を消した。

「エイズ・・・」

取り残された俺は、美咲の出でいったドアを見つめながら、無意識に言葉を発していた。

年の暮れ押し迫ったこの時期、広告代理店は一年で唯一とも言える若干の休息期間に入る。クライアントも休みに入ってしまう、仕事量が一気に減るのだ。もちろん、営業の俺も、回れる取引先がなくなり、来年のスケジュールを立てるくらいしか仕事がない。年末年始の休暇も明日からだ。そんな一年で一番楽しいはずの時期に俺は、暗い顔で会社のデスクに両肘をついていた。

昨日の晩、俺は、零時過ぎに自宅についた。キツネにつままれたような気持ちのまま帰宅した俺は、自宅のベッドに腰かけ、美咲の出でいったホテルのドアを頭に浮かばせていた。

「美咲は、エイズだったのかぁ」

言葉にもならない独り言をポツリと囁いた俺は、美咲と出会ったクリスマスの夜のことを考えた。俺の目には、とにかく明るい少女として映っていた。瞳の奥底に秘めた暗い影など気付くことさえなく、俺は、美咲と食事を共にして、ホテルへ向かった。酔いの進んだ俺は、勢いに任せて、美咲を抱いた。美咲は、俺に抱かれながらピルを常用していることを告げた。そして、俺と美咲は・・・

「んっっっ！？あれ？」

俺は、ハッとした。

「えええっっ！？」

俺は、重大なことに気付いた。その時、やっと・・・。それまで、全く気付かず、俺はのんきに、美咲は可愛そうな娘だったのか、くらいに思ってホテルから帰ってきた。

そうなのだ。俺は、美咲に促されるまま、ゴムもつけずに行為に及んだ。そして、果てた。俺は、やっと事の重大さに気付かされた。今の今まで全く気付かなかった。そう、俺は、エイズに感染している。・・・俺は、辺りを見回した。

「どうしよう？」

俺は、心の叫びが無意識に口に出てしまった。愕然とした。そして、今初めて、美咲の「ごめんなさい」の意味を噛みしめた。と同時に、怒りが腹の底からこみ上げてくるのを感じた。

「ふざけるなよ」

俺は、窓のカーテンの一点を凝視し、歯を食いしばった。俺は、こぶしを握り、携帯を手にした。美咲の番号を押し、打ち震える唇で美咲が出るのを待った。しかし、どんなに携帯を呼んでも美咲は出なかった。

俺は、布団に入っても眠ることなどできなかった。収まりかけた怒りは、時間と共に後悔の念に変わり、自分自身を責めた。

「なんでこんなことに・・・」

「どうしたんですか？」

肘をついたまま固まっている俺に同僚は、代る代る声をかけた。

「顔色悪いぞ。昨日までの笑顔はどこ行っちゃったんだよ。明日から休みだぞ」

部長にまで心配され、肩を叩かれる始末だった。俺は、ため息をついた。昨日まで浮かれて一人ニタニタしていた俺は、昼の休憩に入っても、食事をとる気にもなれなかった。ボーっとして宙を見つめていた。

♪♪こーいしちゃった♪♪ あ の ♪

携帯を慌てて手に取ると

「愛美さん・・・」

ボソッと呟いた。

「あ、もしもし・・・」

「あ、健太さん？・・・あの、大みそかの夜から、初詣、行きませんか？もう、休みですよ？」

愛美さんの声に救われたような気がした。が、気持ちは、沈んだままだった。

「あ、そうですね」

気の乗らない沈んだ声に

「大丈夫ですか？神社とか行かないんですか？」

愛美さんの声は、電話の向こうからでも優しくかった。

「あ、いえ、行きましょう。じゃ、大みそかに」プチッ

そう言って携帯を切ると、俺は、改めて深いため息をついた。

毎年、大みそかの JR は 24 時間営業だ。除夜の鐘を聞いても、初詣に向かうお客のために電車は走り続ける。

「まだ、バラの花、咲いてるんですよ」

あと、数十分で除夜の鐘と共に新しい年を迎える。

あの後、美咲の携帯にメールは送ったが、返信もなく、電話も全くかかってこない。どこでどうしているのか？

「あ、そうですか、つぼみの多いやつ選んでもらったからですかね」

愛美さんと待ち合わせした俺は、行先を告げられることなく、愛美さんに連れられるように電車に乗り込んだ。愛美さんは、いつもと同じように俺に話しかけ、いつもと同じように笑顔だった。しかし、俺は、愛美さんを前にしながら、ぼんやり美咲の影を追っていた。確かに、美咲の行為に腹を立てた。しかし、時が経つにつれ、なぜ、「ごめんなさい」という言葉を残したのか、そして、二度目の情事の際、俺にゴムを着けるよう促した理由はなんなのか、そんなことが今更になって気になりだしていた。しかし、それと共に、「俺は、エイズだ」と言うなんともやるせない気持ちが膨らみを増してきている実感もぬぐえなかった。とにかく、自分ではどうしようもない気持ちに苛まれ、毎日をどう過ごしていいのかも分からないまま年末の数日を過ごしここにやってきたのだ。

「なんか、疲れてるみたい・・・」

「え、いや、そんなことないですよ」

俺は、愛美さんに微笑みかけるつもりが、うまく微笑むことができず、真っ暗な窓の方へ顔を向けてしまった。

10、

電車のドアが開くと、俺と愛美さんは、押し出されるようにホームに降り立ち、離れ離れにならないように俺は、愛美さんの手を握った。

「えっ！？」

びっくりしたように愛美さんは、小さく声をあげたが、俺の手に引かれて何もなかったかのように改札の方へ進んだ。俺は、愛美さんがこちらをチラチラ気にしながら着いてきているのが分かったが、そのことには触れずに、この真夜中の混雑で二人がはぐれないように手の指を強く握って歩いた。

駅から外へ出ても、人のごった返した様子は、渋谷の交差点にでもいるようだった。雪が舞ってきそうなほどの気温なのに大みそかの街中は、人の熱気で寒ささえ感じないような空気に包まれていた。俺は、人込みを嫌うように

「裏道から行きましょう」

そう言って、愛美さんの手を引いた。大通りから一本入っただけで人は、まばらになり、あの混雑が嘘のように静かだった。俺は、愛美さんの手を離し、

「毎日、ラッシュの電車に乗っていると、人が嫌いになっちゃうんですね」

そんなセリフを誰に言うでもなく口にするともたゆっくり歩き出した。

「私のことも・・・嫌いですか？」

急な愛美さんの言葉に、歩き出した足を止め、びっくりして振り返った俺に愛美さんは、小さな舌をペロッと出すと、ぴょんと俺に飛びつき、俺のひじに自分の手を絡ませた。俺の沈んでいた顔が少しほころぶと

「よかった」

愛美さんは、一言、呟いて俺の横で足を前に踏み出した。さっきまで広がっていた重たそうな雲の切れ間から、2、3の星の輝きと、まるで糸のように細い三日月が顔を出し、二人の姿を見守った。俺は、愛美さんの絡まった手首を取り、もう一度手のひらを合わせて手を握りなおすと、俺のコートのポケットに握ったままの二つの手を一緒に押し込んだ。

「あったかい」

言葉少なに、愛美さんはニコッと笑うと俺の肩に頭を乗せた。それからの二人は、どちらも口を開かず、二人の愛を確かめるように黙ってゆっくり歩みを進めていった。しかし、俺の頭の中には「エイズ」と言う3文字が離れず、常に脳の両端を行ったり来たりして俺が言葉を発しようとするとその機会を失わせているのだった。

ゴーン　ゴーン

「あっ、あけましておめでとうございます」

もう、神社が目の前まで迫ってきた頃、どこからか、除夜の鐘の音が聞こえてきた。

「あ、おめでとうございます」

住宅街から聞こえるテレビの音なのか、近くにお寺があるのか、時計を見ると、ちょうど針は12時を指していた。愛美さんの微笑みの中、新しい、年の初めだと言うのに、俺の気持ちは少しも晴れず、この一年をどう過ごせばいいのか、悩みの中で迎えた新年だった。もし、俺がエイズだと分かったら会社を首になるのだろうか？当然、今こうして隣にいてくれている愛美さんだって離れていくだろう。もし、数年で発症したら命だって絶たれてしまう。この大みそかまでの数日、俺はどん底の中で過ごした。真昼の太陽が照り付ける中でも目の前は真っ暗だった。できれば今日だって来たくはなかった。愛美さんにどんな顔をして会えばよいのだろう。案の定、愛美さんは俺の落ち込みに気付き、必要のない気まですわせてしまっている。どうしようもないやりきれなさ。神様の前で手を合わせ、自分の不徳の至りを詫び、この病気を治してもらうようにでも祈ればよいのか。

トボトボと歩みを進めていると急に俺の目に留まった文字がある。

俺は、ポケットの中の愛美さんの手をギュッと握ってしまった。

『休憩』

急に足を止めて手を握られた驚きから、愛美さんは俺の顔を凝視した。

「どうしたの？」

俺の視線の先を愛美さんも向き直ると

「えっっ！？なにっ？えっ！？」

そう言って辺りをキョロキョロと見回した。

「あっ、いや・・・」

俺が足を止めて立ち止った目の前には『休憩 3500～宿泊 7500～』の水色の文字がくっきり浮かんでいた。俺は、愛美さんの方に視線を向けて

「いや、違う、別にそう言うことじゃなくて・・・」

意味不明の言い訳を口にして、その場をとりつくろうとした。しかし、そのことが逆に愛美さんに不信感を抱かせてしまったのかもしれない。

「この道、選んだのって、そう言うことだったんですか？」

「えっっ！？いや、違う、ほんとに、道が混雑してたから」

俺は、必死だった。でも、愛美さんの目を見ると、明らかに怪訝そうな目つきでこちらを窺っている。その愛美さんの目を見た瞬間、ここ数日の自暴自棄の俺の本性が一気に溢れ出てしまったように愛美さんに食って掛かった。

「そうですよ。だめですか？お互いが好き同士なら、いいんじゃないですか？だめですか？」次の瞬間、愛美さんは、汚いものでも触るように俺のポケットから手をいきなり引き抜くと、息を荒げながら言った。

「私、古い考えって言われるかもしれないですけど、そう言うことって、結婚してからって考えてたんです。いけませんか？」

「えっっ、いや、いけませんか？って言われても・・・」

一瞬たじろいだ俺に、愛美さんは、くるっと後ろを振り返って俺に背を向けると突然走り出した。今、来た道を駅の方へ走り出したのだ。

「あっっ・・・」

俺の差し出した手の指と指の間には、あっという間に小さくなっていく愛美さんが映っている。

ほんの1分の出来事だった。

やってしまった。俺は、なぜあんなことをやってしまったのか。いくらやけになっていたとは言え、あんなことを口走るとは、自分自身を疑ってしまう。正直、愛美さんとそんなことは考えたこともなかった。愛美さんとの愛は、本当にゆっくり育んでいこうと思っていたのだ。愛美さんとのお付き合いまでに1年間の長い歳月を費やし、やっと始まるかと思えた途端の美咲との出来事。そして、美咲の最悪の証言。そして最後には、この有り様だ。それも、新年が開けてまだ1時間と経っていない。なんという年の初めなのだろう。

俺は、このままどこか、誰も知らない世界にでも行ってしまいたくなった。

俺は、とても新しい年の初めとは思えない、重い、重い足取りで、今、愛美さんが見えなく

なってしまった道を、後を追うように歩き出した。空を見上げると、さっき二人を祝福するように顔を出した月も、また分厚い雲に覆われ、どこか見えないところへ隠れてしまっていた。

「最悪だ・・・」

11、

正月の三が日、俺は、余命宣告を受けた病人のように部屋に引きこもった。カーテンすら開けていない部屋の流しには、一日一食のカップ麺の器が散乱していた。

得てして、こんな時に限って仕事の休暇とは長いものだ。気を紛らわすためにも早く仕事に戻りたいと思っているのに、まだあと丸三日も休みがある。俺は、また、布団に潜り込み毛布を頭から被ると、深いため息をついた。その後、すぐに布団から顔だけ出すと天井の波模様をぼんやり眺めてまたため息をつく。こんなことを繰り返して一日が過ぎていく。俺の精神は壊れかけていた。

♪♪こーいしちゃった♪♪ あの日♪♪♪ ♪♪星降る夜・・・♪

(・・・美咲?)

俺は、なぜかその電話が美咲からのような気がして、布団から這い出ると携帯を手にとった。

「今さら、なんだよ」

やはり美咲からの電話に、独り言を呟くと鳴り続ける携帯を切ろうとした。

♪♪・・・このメロディー♪♪ ♪♪君からのメッセージ♪♪ ♪♪・・・♪

続けて鳴る着うたの歌詞がなぜか耳に残り、突然、美咲とのすべての思い出が走馬灯のように頭の中を駆け巡った。

俺は、話だけでも聞いてみようかと携帯を手を持ち直した。

「・・・・もしもし・・・・」

「よかった。出てくれて・・・逢おう。・・・逢って、お願い。話、聞いて」

慌てて電話の向こうでプツ、プツと単語だけでしゃべっている美咲の言葉は、俺にすぎるようだった。

「今さら何だよ。もう、話すことなんかないだろ？」

俺は、ぶっきら棒に返答すると携帯を切ろうとした。

「待って。これから、・・・これから、逢って。・・・あの銅像のところで待ってるから」

「行かないぞ。別に話すことなんかないから」

そう言い放つと、俺は、携帯を切りかけた。その携帯から

「ずっと待ってるか・・・」 プチッ

美咲の途切れる声が聞こえた。俺は、両腕をダランと垂らし、宙を見つめた。

「話なんかないよ・・・」

うわ言のように呟いた。

昼近くまで俺は、ベッドの中でゴロゴロと病人のように過ごした。しかし、昼を少し回る頃、急に美咲のことが気になりだしてきた。しかし、正直、美咲と逢って冷静に話をすることなどできないと思った。自分のことなんか棚に上げ、また、美咲を責めてしまうだけだと思った。

「何を話そうって言うんだ・・・。でも、・・・もう、・・・待ってるわけがない」

美咲の電話から4, 5時間を経過しようとしていた。俺は、いくらなんでも、もう美咲は待っていないと思った。

「たぶん、もういない。いるわけがない・・・」

そう独り言を呟きながらも俺は、部屋着を脱ぎ捨てると、ワイシャツに手を通した。とりあえず、あの銅像の所へ行くだけは行ってみてもいいような気がした。いなければ戻ればいい。そんな言い訳を自分の頭に思い込ませながらズボンのベルトを締めた。逢って話すことなどないと言っていたのに、俺は、コートを片手に取ると、手早く玄関の鍵を閉めて駅までの道をいきなり走り出した。無精ひげを汚く伸ばした俺は、このコートを着ていなかったら、街角のホームレスのように見えたかもしれない。しかし、その時の俺は、そんなことは全く気にならなかった。電車に乗り込んでも、周りの乗客の目などほとんど無視した。駅に着き、開きかけの扉をこじ開けるように外へ出ると人の波を掻き分けるように進んだ。俺は、銅像目指して走った。

俺は、美咲に逢いたかった。

あの、初めて美咲がオーケーの仕草で俺に近づいてきた、あの銅像の見える所まで来た。やはりいない。キョロキョロと辺りを見回した。しかし、美咲の陰は見当たらない。ガックリ肩を落として銅像に近づいた。

「んっ!？」

誰か女性が、銅像の脇で、もたれるようにしゃがみこんでいる。

「あの・・・」

俺は、駆け寄った。駆け寄ってその女性の肩をゆすった。ゆっくり顔をあげた女性の頬はこけて、目はトロンと虚ろだった。

「美咲!？」

俺は、目を疑った。いつも元気な美咲の顔は痩せこけ、心なしか肩も骨ばって感じた。

「痩せたね・・・大丈夫?それに、そのひげ、どうしたの?」

先に言葉を口にしたのは美咲だった。

俺は、美咲を抱きかかえるように立たせると

「お前こそ、・・・大丈夫か?歩けるか?」

「大丈夫だよ。・・・来てくれたんだ・・・」

全然、大丈夫ではなかった。俺に支えられて歩き出した美咲の足取りは、よろよろと、肩を

貸さなければまっすぐ歩けないくらいだった。俺は、とりあえず、公園のベンチまで美咲を運んだ。先に美咲を座らせると、隣に俺も腰かけた。俺が、座るとすぐにかすれるような声で美咲は話し出した。

「ね、病院、・・・いこ。・・・ね、・・・病院」

俺は、言われるまでもなく、美咲を病院へ連れていきたくかった。まっすぐ歩けないほど衰弱した美咲を早く診てもらいたかった。軽く頷いた俺に向かって美咲は、

「あっつ、・・・でも・・・保健所の方が・・・いいか、無料だし・・・」

とぎれとぎれに言葉を発すると俺の顔を見た。

「えっっ!？」

俺は、美咲の言っている意味が分からなかった。昼の日差しを受け、公園のベンチは、真冬の正月とは思えないほど暖かかった。俺は、もう一度、美咲の顔を覗き込むと、美咲はゆっくり目を閉じた。

「あたしさ、・・・死のうと思ったの。・・・け一たにエイズを告白してから、け一たに大変なことをしてしまった、って改めて感じて・・・って言うか、初めて逢った時から、何かけ一たには違う感覚があった・・・。うまく言えないけど、他の人とは違うって」

俺は、小さくかすれるような声で一生懸命話す美咲の声に耳を傾けた。美咲の話すことなんか何も聞くことはないと思っていたのに、こんなに衰弱した美咲を前にすると、さすがに美咲が今日まで何を悩んでいたのか聞かずにいられなかった。

「・・・あたし、実は「血友病患者」として産まれたの。で、「血液製剤」で HIV に。母さん一人に育てられたんだけど、高校に上がる時母さん病気で死んじゃって・・・」

美咲は、つむっていた目を開けると、公園の枯れ木に目をやった。枯れ木の数枚の葉が風に揺れていた。

「そのあと、あたし、親戚のところに行ったんだけど、エイズって言われて、うまくいかなくて・・・」

俺は、美咲の肩を抱いた。美咲は、続けた。

「あたし、お金もなかったし、・・・でも当然、移るって分かってたけど「援交」なんてやってる人、なんか許せなくて・・・なんか、あたしが悪いやつらをやっつけてるって言うか・・・よく分からないけど、悪いことしてるって気持ちはなかったの。でも、け一たはなんか違って、・・・だから、・・・病院、・・・いこ」

最後の「だから」についてはよく分からなかったが、美咲が今日まで必死に生きてきたことだけは分かった。美咲を肯定も否定もしない、今の俺は、美咲に激怒した自分自身を恥ずかしくさえ思えるくらい落ち着いた気持ちになっていた。しかし、だからと言って、俺自身の「エイズ」と言う問題が解決した訳ではない。

「うん、分かった。でも、・・・病院は行かない」

俺がそう言うと、美咲は

「どうして？」

俺の腕の中で首をひねった。

俺は、美咲から目を離すと、遠くを見つめて言った。

「そんな、死刑宣告、自分から受けに行くの嫌だよ」

美咲は、俺の横顔を見つめながらゆっくり両手を俺のひざの上に置いた。

12、

「俺が、エイズだって分かったら、たぶん会社も首になる。仮に、首じゃなかったとしたって、周りの人間にそんな目で見られながら生活するのなんて、俺は、・・・できない」

公園の枯れ木の黒い影が、二人の座るベンチの方へ徐々に長さを増してきた。

「あたし、けーたを好きになっちゃったのかな・・・」

ボソッと呟くような美咲の声は、小さすぎて、風の音にかき消された。

「えっつ、なに？」

「あたし、けーたには、生きてほしい。少しでも長く。今は、HIV でもエイズの発症を遅らせる薬があるの。だから・・・」

俺も、そんなワクチンの話は聞いたことがあった。だからって人の目を気にしながら生きていく勇氣は俺にはないのだ。

「あたし、死のうと思った。でも、できなかった。けーたにどうしても話しておかなきゃいけないって思って。・・・あたし、けーたが好き。だから、病院に行って。お願い」

俺は身体を震わせた。そして、地面に落としていた視線を空の彼方に向けた。

考えてみれば、初めて美咲に逢った夜から、俺は、ずっと美咲のことばかり考えていた。愛美さんとのデート最中まで美咲が頭の中にいた。一人ベッドの中で天井の波模様を見つめている時だって、頭の中は美咲がいたのかもしれない。俺は、銅像の脇で本気で美咲を心配した。まだ、初めて出逢ってから2週間も経たないと言うのに、もう何年も一緒にいるような気がした。

それ以上に美咲と長く、深い恋愛をしてきたように思えた。

「分かった。・・・病院に行く。だから、おまえも、もう二度と死のうなんて思うな。俺が、ずっと一緒にいるから」

美咲は、俺の腕の中で少しだけ微笑んで、「よかった」と声にならない声でつぶやいた。

そこに、俺が初めて出逢った時の無邪気な美咲はもういなかった。悲しみをいくつも乗り越えてきた大人の美咲の姿がそこにはあった。

俺は、その晩、初めて美咲を俺のアパートに連れていった。美咲は、俺に、エイズを告白したあと、ほとんど食べ物を口にしていなかったらしい。栄養失調寸前でふらふらになりながら俺と公園のベンチで話をしていらしい。俺のアパートで食事をして、日を重ねていくう

ちに、徐々に明るい元気な美咲に戻ってきた。俺も、無精ひげを剃り、休みが明けた会社へも通常通り出勤した。年始の挨拶回りで忙しい日々がまた始まった。しかし、美咲との約束の病院へはまだ行けていない。そして、石原印刷への年始の挨拶も。

大みそかの晩、愛美さんとのあんな別れのあと、俺は、愛美さんに連絡することもできないまま、アパートで美咲との生活が始まった。今になって思えば、愛美さんとのあの夜、もし、愛美さんが了解すれば、俺は、あのまま愛美さんとホテルに入り、行為を行ってしまったのだろうか？あの時、俺は、すでに美咲からの告白を受け、エイズであることは分かっていた。その状態で愛美さんと結ばれれば、愛美さんにもエイズを移してしまう。俺は、あの時、一体、何がしたかったのだろうか？別に、愛美さんと本当に、セックスをしたかっただけでないことは確かだ。たまたま、あの場所にホテルがあったと言うだけで、俺にやましい気持ちは全くなかった。しかし、自暴自棄だった俺は、実は愛美さんにエイズを告白して、それでも構わない、なんて答えを期待していたのかもしれない。とにかく誰かに慰めてほしい。ただ、そんな気持ちだけだったのかもしれない。

とにかく、愛美さんには、俺が意図的にあの場所へ連れて行っただけという誤解をされたまま、今日に至っていることは否めない。そして、俺は個人としてではなく、会社の一員として、愛美さんのもとを訪れなければならないのだ。

俺は、重い足取りで、「石原印刷」と書かれた扉の前までやってきた。俺は、ため息を一息つくとも扉をノックした。女性の返事が返ってきた。俺は、扉の中へ押しやった。

「こんにちは」

「いらっしゃー・・・」

こちらを振り返った女性は、一瞬、凍ったように固まり、俺から目を逸らすと何もなかったように話だした。

「・・・いませ。・・・社長は、今日は、出張で一日戻りませんが・・・」

目の前の女性は、まぎれもなく愛美さんだった。

「あっ、・・・そう・・・ですか。・・・あ、今日は、・・・新年の挨拶に伺っただけですので、・・・社長によろしくお伝えください。・・・では、・・・失礼します」

俺は、ごこちなく頭を下げると後ろを振り返り扉に手をかけた。

「あの・・・、ちょっと・・・私も大人げなかったかなって・・・」

「えっ！？」

背中越しに愛美さんから声をかけられ、どう返答していいのか分からず、俺は、

「あ、いや、あの・・・失礼します」

そう言って、振り返りもせずに、そのまま扉を開けると、そそくさと外に出てしまった。俺は、正直、どうしていいのか分からなかった。俺の病気を愛美さんに伝えるかどうかにも決心がつかぬまま、愛美さんと長い会話をすることはできないと思った。扉の外で、俺はうなだ

れ、肩を落として歩き出した。

駅までの道のりは、永遠のように感じられた。俺は、10メートルくらい歩いたのだろうか？突然、背中を誰かにつつかれた。ビクッとして振り返ると、そこには黙ってうつむいた愛美さんが立っていた。

「えっ！？どうしたんですかあ？」

目を丸くしている俺に愛美さんは話し出した。

「あの、怒ってるのかもしれないですけど、私、このまま終わりになっちゃうの嫌だなんて」
愛美さんは、俺の目を見ることなく、一気にしゃべり切った。

「あっ、でも僕は・・・」

一区切りおいて、俺からそらしたままの愛美さんの目を見て言った。

「あの・・・、僕は、愛美さんと付き合える資格なんてないんです。そう言う男なんです。・・・すみません」

そう言い残すと、俺は、その場から走り去った。

しばらく走って後ろを振り向いたが、もう、愛美さんは追いかけては来なかった。

13、

俺は、その晩、久しぶりに美咲を外食に誘った。

別に意味などない。しかし、あの、アパートの狭い部屋に居ることが耐えられなくなったのだ。

「暗いぞお。なんか、恋愛に敗れた乙女みたいな顔になってるぞお」

俺は、美咲に愛美さんとの一見は一言も話していない。なのに、美咲からそんな言葉を聞き、びっくりした俺のテーブルを挟んだ向こう側には、美咲の笑顔がこぼれている。そう言えば、俺は、アパートを出てから、浮かない顔で一言もしゃべらずにここまで来た。

「・・・ああ、・・・なんにする？好きなもの食べなよ」

俺は、愛美さんもまだ諦めきれずにいるのだろうか？こうして、美咲と一緒に生活を始めた。愛美さんとは、もう、あの犬みそかの晩、始まってもしないのに、完全に終わった。でも、今日しばらくぶりに逢ってみると、気持ちの揺らいでいる自分がいる。しかし、このエイズと言う身体では絶対に付き合えないことも分かっているが、この未練たらしい自分の姿は何なのか。我ながら恥ずかしく思う。そして、何より、目の前で優しく微笑んでくれている美咲に申し訳ない。ほとんど自分が嫌になる。

「明日さ、病院に行こうと思う。有休も取ったし・・・」

こんな自分はもうどうなってもいい。そんな思いがあったのかもしれない。俺は、死刑宣告を受けに行く決心をしたのだ。テーブルの上の水に口をつけながら俺は、美咲の顔を見た。その瞬間、俺は、美咲の顔がみるみるうちに満面の笑みに変わっていく様を見た。

「ほんとぉ？よかったぁ。あたしも一緒に行くう」

俺は、ここまでの美咲の笑顔を見たことがあっただろうか？本当に嬉しそうに目を輝かせ、俺の手を握ろうとしている。そんなに、俺が病院へ行くことが嬉しいのか、俺は、なぜ、そこまで美咲が喜ぶのか意味が分からなかった。でも、その美咲の顔を眺めているうちに俺も何となく、気分が晴れてきたような気がした。

注文の品が運ばれてくると、美咲は、

「食べよ」

そう言って、いきなり口いっぱいハンバーグをほおばった。

「熱っっ」

口をハフハフしている美咲を見ると、自然と俺にも笑顔がこぼれた。俺も、スープを片手にフォークをサラダに突き刺した。しかし、明日のことを考えると、ただ笑っているだけというわけにもいかない。気分がまた滅入ってしまいそうなので、なるべく今を楽しもうと自分に語りかけるのだが、どうしても医者の顔が目の前をちらつくのだ。あまり、食の進まない俺に向かって美咲は、

「食べないの？けーた、あたし、もらっちゃっていい？」

そう言うと、俺の皿に手を伸ばした。

「俺、けーたじゃないって言ったろ」

「いいの。あたしはけーたのままで。ダメ？」

俺は、美咲と初めてあった時、名前を偽った。初めて会った得体の知れない少女に本名を教えることを控えたのだ。

「まあ、いいけど・・・」

俺のアパートには、表札がある。それを見ても何も聞かない美咲に、俺は自分から本名を名のったのだ。美咲は、決して多くを語らない。そして、俺のプライベートも決して聞こうとはしないのだ。俺は、ビールのおかわりとポテトを注文した。

「なあ、美咲、おまえ、エイズって怖くないのか？」

「全然」

俺の質問に即座に応えた後、少し間をおいて美咲は言った。

「でも、けーたに逢ってから少し怖いかな……。あたし、いつ死んでもいいと思ってたの。でも、けーたに逢って、・・・すぐに死んじゃうの嫌かなって。死のうと思っても死ねなかったし・・・」

俺は、ため息をつくとき、美咲の顔を見た。

「そっか」

俺は、勝手にうなずいて、美咲から目を外すと、運ばれてきたビールを手にとった。その後

しばらく二人は、何も話さず、機械のようにビールとポテトを交互に口に運んだ。

「行こうか」

俺は、先に席を立つと外に出た。

「寒いな」

俺は、後からついてきた美咲の手を取ると歩き出した。俺は、美咲をアパートに連れてきてから、一切、手も握っていなかった。当然、美咲とのセックスだってしていない。別に、日常生活で、エイズが移ることがないことも分かっていた。キスをしたって、セックスだって。しっかりゴムさえ着けて行為に及べば何の問題もないことも知っていた。しかし、気持ちがなぜか美咲を拒んでいた。美咲を好きな気持ちも、なぜか、美咲がエイズだと言うことが、自分の気持ちを制御するのだ。でも、美咲の心を聞いた今、俺は、美咲の手をしっかり握っていた。美咲が痛がるくらいに手を強く握りしめていた。おそらく美咲は、親戚の所に引き取られた時も、今と同じような何となく自分に接してくる人たちからの違和感を覚え、一人苦しんでいたのだろう。

「おまえは強いな・・・ごめん」

歩きながら言った俺の言葉に、美咲は、不思議そうな顔をして俺の方を眺めていた。俺は、美咲をアパートに自分で連れてきておきながら美咲と距離を置いていた。そんな自分が恥ずかしかった。

俺は、その晩、美咲を抱いた。

美咲は初めのうち、若干、躊躇していたようだが、俺の腕の中で吐息を荒げるうちに徐々に乱れて、女になっていった。最後に俺が果てるのと同時に美咲の両腕は俺の背中をギュッと締め付け、二人は、ぴったりくっついたまま一緒に結ばれた。

俺は、改めて、美咲と生きてく決心を固めた。

次の日、俺は、美咲と病院の待合室にいた。

「田中さーん」

俺は、黙って立ち上がると、チラッと美咲に目をやったが、何も言わず診察室の前まで進み、扉の中へ吸い込まれた。

しばらくして、もう一度、診察室の扉が開いた時、美咲は立ち上がって、目の前まで来た俺の顔を覗き込んだ。俺は、何も言わず立ったままの美咲の隣に座った。それに釣られるように美咲も腰を下ろした。二人は、何一言も口にすることはなく、ただ黙って座り続けた。小一時間、経過したころ、また、名前を呼ばれた。さっきの扉とは違う扉に案内された。看護師さんに連れられ中に入ると、物々しい雰囲気の中、先ほど診察した先生が机に向かっている。看護師さんに誘導され椅子に座ると、先生が重々しくこちらを向いた。先生は、カルテを見ながら、

「えー、田中さん、陰性です」

「・・・はいっ!？」

うつむいていた俺は、大きな声と共に先生の方を見上げた。

「えー、血液検査の結果、陰性です。ただし、この検査は、スクリーニング検査と言って・・・」

俺は、こんな部屋へ連れてこられて、当然のように、エイズを発症するまでの心構えや、生活、その他注意事項を指導されるものと思っていた。それが、思ってもみない先生の言葉に、俺は、突然、常夏の南の島にでもやってきてしまったように目の前が明るくなった。

「えっっ！？陰性ってことは、俺、エイズじゃないんですか？」

俺は、先生の説明も聞かずに食いついた。

「いや、ですから、この検査は、スクリーニング検査と言って、田中さんの場合、まだ、感染の疑いのあった日から日が浅いので、完全に陰性と言うわけではなく、3か月後くらいにもう一度検査をして、陰性なら完全に感染はしていないことになります」

俺は、もう一度先生に聞いた。

「じゃあ、まだ、感染は分からないってことですか？」

先生は応えた。

「んー、まあ、そうですね。HIVの抗体は、疑いの日から4週間ほどで検出されるのですが、個人差があります。田中さんの場合、ちょうどそのくらいなので、まだ、感染の疑いが完全に消えたわけじゃないってことです」

「分かりました」

頭を下げ、立ち上がろうとした俺に、先生は

「まあ、こういう検査に来ることの無いよう、今後は、生活態度を改めてください」

そう言うと、「お大事に」と付け加えた。俺は、部屋を出ると、廊下の白い天井を仰ぎ見た。複雑な気持ちで美咲の待つ、待合室に戻ると

「俺、・・・陰性だった・・・でも、もう一度検査に来なくちゃいけない」

そう言った。美咲は、

「あ、そう、・・・でも、良かったあ」

本当に心の底から喜んでくれているように見えた。俺は、帰り道、美咲の手を取り、抱きしめたくなる衝動を抑えながら、美咲の唇に俺の唇を近づけた。その瞬間、思いもよらない言葉が美咲の口からこぼれたのだ。

「ねえ、あの人、どうしてるの？あの、クリスマスの日、待ち合わせしてた女性（ひと）」

「えっっ！？」

俺は、突然の言葉に、美咲に近づけた顔を引き戻しながら美咲のまん丸の目を凝視した。

「あの女性（ひと）のどこ、行きなよ。あたし、明日、出てくから・・・好きなんですよ、あの女性のこと」

俺は、口を半開きのまま、固まって、目だけパチパチとしばたかせていた。